

# 蔦谷栄一の 異見私見



くするに至っている。  
70年前後には飼料用米

よる「攻めの農業」が  
突出する中で全体の助  
成体系なり水準が見え  
ないままでのとりまと  
めはいただけない。い  
たずらに現場の不安を  
煽るだけの結果となっ  
ている。

農水省はコメの生産  
調整など政策のあり  
方について、「5年後を  
めどに、行政による生  
産数量目標の配分に頼  
らなくても、生産者ら  
を中心に、需要に応じ  
て米を生産できる状  
況」を整えていくとし  
て、米直接支払交付金  
の10aあたり現行の年  
1万5000円を75  
00円に半減し、5年  
後にはこれを廃止する  
とともに、米価変動補  
てん交付金を14年産米  
から廃止する。あわせ  
て飼料用米への助成を  
現行の8万円以上にす  
ると同時に、収穫量に  
応じて支払う数量払い  
を取り入れていく、等  
を骨子とする中間とり  
まとめを明らかにし  
た。すなわち、これまで  
の生産調整に参加する  
農家へのメリット措置  
として助成が行われて  
きた主食用米に対する  
米の直接支払交付金か  
ら、転作助成金に当た  
る水田活用の直接支払  
への移行を軸にして、  
米政策全体を大きく転  
換しようとしている。

ところで肝心の問題  
はアベノミクスの成長  
志向・経済優先の姿勢  
にある。目指すところ  
は大規模化・画一化に  
よる競争力強化であ  
る。まさに日本農業の  
アメリカ化といえる  
が、こうしたアメリカ  
化の流れにしたたかに  
対抗しているのがEU  
である。環境、食品安  
全、家畜福祉、地理的  
表示等を駆使し、差別  
化を徹底することによ  
ってEU農業の生き残  
りを図りつつある。そ  
こにあるのは歴史・風  
土・文化についてのア  
メリカとの違いに対す  
る明確な認識であり、  
何よりも地域に対する  
愛着と誇りがこうした  
展開を可能ならしめて  
いると考える。

## 矜持(きょうじ) を保て

減少と高齢化が予測さ  
れる中で、米生産調整  
の強化は必至であり、  
すでに追い込まれてし  
まって、もはや後がな  
い、というのが実情で  
はあるが、  
しかしながら米生産  
調整見直しは産業界争  
力会議での民間議員か  
らの提言がもとになっ  
ていること、またあま  
りにも唐突で現場の意  
向が反映されるいとま  
もなかったこと、そし  
て何よりも大規模化に

米生産調整の本格的  
な開始は1971年に  
さかのぼるが、当初、  
一時的とされていた措  
置が恒久化するととも  
に、次第に規模を拡大  
させ、今日では約4割  
もの生産調整を余儀な  
くするに至っている。  
70年前後には飼料用米  
や飼料用稲の研究がす  
められ、その必要性  
なり可能性についての  
議論も展開されなが  
ら、米生産調整の見直  
しは回避され、先延ば  
しが繰り返されてき  
た。その意味では遅き  
に失うとはいえ米生  
産調整に抜本的なメス  
を入れ、穀物政策全体  
の問題として水田活用  
のあり方を考え直す  
との決断は評価に値す  
るといえる。もっと  
も、今後さらなる人口

先般、全日本農民組  
合連合会会長の斎藤孝  
一さんとお話する機  
会があったが、「今こそ  
必要とされるものこそ  
が、百姓としての矜  
持、だ」との斎藤さん  
の言葉が胸に突き刺さ  
った。中小・零細とは  
いえ食へ物を生産・供  
給し、環境を守り続け  
てきた農家は、もっと  
自らがこれまでやって  
きたことに誇りを持  
て、との意味と理解し  
た。今、農家だけでな  
く政府も国民も、あら  
ためて「矜持」を保つ  
ことこそが何よりも求  
められていることでは  
なからうか。農的社會  
デザイン研究所代表